

# 佛教の合理性と非合理性

## — 佛教の三類型 —

佛教の正體を明かにし、これを體解するためには、色々な面から、又色々な方法によつてこれを實現せねばならない。佛教はしばしば合理的宗教であると云はれるが、これを過度に主張すれば、その結果は、やがて佛教の宗教性が否定されることにならう。事實、佛教の中にはかゝる合理性と共に、極めて非合理的な、超合理性が包含されている。むしろ佛教の宗教性はこのような非合理性にあるとも云はれるのである。従つて、佛教の中には非宗教的な合理的、倫理的、哲學的要素が多分にあることを認めねばならないのではあるが、同時に又、佛教の非合理的宗教的要素を見失つてはならない。二つの要素の調和混在こそ宗教としての佛教の特色であると云はねばならない。

ヨーロッパの佛教學者や宗教學者の中にも、佛教の合理的、科學的、倫理的、哲學的性格を指摘して、佛教の宗教性を否定しようとした人も多い。特に、キリスト教的神の存在や、

佛教の合理性と非合理性 (岡)

岡 邦 俊

この神に對する祈禱を佛教が認めない點を擧げて、佛教の宗教性を否定しようとした學者が多い。勿論反對に、歐米の佛教研究家の中にも佛教の宗教性を主張した人も多い。これら對立的見解について二、三その實例を示してみよう。ハストンスミス氏は「佛教は人間から出發する」と述べ、ゼーボンス教授は、「佛陀の教えは本質的には非宗教的である、それは、人生問題の解決として神信仰は無用のものとされ、救済は人間自身から來なければならぬ」と論じて居る。併し、ゼーボンスは佛教が教祖釋尊を理想化し、神格にまで高められた時に宗教となつた、と附記していることも注目すべきことであらう。オーガスト・ライシャウア博士は「神並に神と人間との關係についての思想」「超越的啓示」と云ふものを持たないことが、佛陀の教説の本質であると主張した。

メンチース教授も「吾々は歴史的目的からは、佛教を宗教として分類することが出来るが、實際には佛教は宗教的觀念

を排除して居り、宗教の名を受くるに値いしない」と云つて居る。モニア・ウイリアムズ博士も「少くとも最も初期の、そして最も真正なる形での佛敎は、全く宗教ではなくして、人生に對する厭世主義的理論の上に築かれたる單なる道德及び哲學の體系である」と考へたのである。クリマス・ハンフレイズ氏も「佛敎は宗教であり哲學である」と述べている。これらの人々は佛敎を「非宗教的」なものと考へたこと、そして、その理由として、神や祈禱の如き宗教的觀念を排除した、倫理的、哲學的な教えであると批判した點に於て一致する。

これに反して、デュルケイム教授は宗教の本質を非合理的「聖なるもの」となし、従つて佛敎の「四聖諦」「八聖道」をもつて宗教性の根據とし、又、ゼーダブローム教授も「三寶歸依」を以て佛敎の宗教性を主張したのである。

増谷文雄教授もこの點に關して、「南無歸依三寶」を聖と考へ、而もこの南無には全人的な憑依の感情と共に、ルドルフ、オットー教授の主張した戰慄にも比すべき「驚怖」の意味あることを指摘した點は興味あることである。もともと非合理性とは、論理や理性を超へた、論理や理性の手の届かぬ、謂はゞ佛敎の用語で表現すれば、「不可思議、不可稱、不可說」の世界であらう。端的に云へば、それはたゞ「信じ仰ぐ」世界である。信仰とは全く非合理的な聖の世界を表現する言葉

でなければならぬ。

佛敎はこの意味で、合理性の背後には常に非合理性を持つて居り、逆に亦、非合理性の背後にも常に合理性を持つて居るのではあるまいか。合理性と非合理性との混在、調和こそ宗教としての佛敎の特色ではあるまいか。既にのべた「四聖諦」「八聖道」の聖はそのまゝ正である點を、増谷教授は特に指摘したが注目すべきことであらう。聖は非合理性を代表し、正は合理性を代表するものであらうが、佛敎ではこの二つが調和している點は興味あり、又、注目すべきことであらう。その他佛敎の説く「十二因縁」「三法印」「涅槃」「業」等の如き原始根本佛敎の教えを初めとし、その後次第に發展した「空觀論」「唯識論」や、天台佛敎の説く「諸法實相」、華嚴佛敎の説く「四法界」、眞言佛敎の「卽身成佛」、禪佛敎の「直指人心見性成佛」や、日蓮の説く「南無妙法蓮經」、淨土佛敎の説く「南無阿彌陀佛」の何れにも、合理的、倫理的、哲學的要素と、非合理的、宗教的、信仰的、南無歸依的要素が交互に混在し調和していることを忘れてはならない。即ち、佛敎の教、行、證には一面に於て極はめて倫理的、哲學的な合理性を含んでいいるが、他面に於て極はめて非合理的な宗教性をも含んでいることは佛敎の特色であらう。一見して倫理的要素の濃厚な原始根本佛敎も、その底には併せて哲學的、宗教的要素が流れて居り、又、佛陀の滅後次第に發

達した大乘佛教は極めて哲學的な深い思想の上に築き上げられてはいても、やはり、その底には倫理的、宗教的要素が嚴存して居ることを忘れてはならない。更に、日本の鎌倉期に興隆した佛教としての禪、日蓮、淨土の諸教は一見して極はめて宗教的性格が濃厚ではあるが、やはりその底には併せて倫理的、哲學的要素が仕組まれてあることを見逃してはならない。

このようにして、佛教は合理的な倫理性、哲學性を持つと同時に、非合理的な宗教性を併せ持つものである。合理性と非合理性、そして倫理的、哲學的、宗教的要素の何れが濃厚であるかによつて、佛教は大別して三つの類型タイプに分類することが出来るであらう。即ち、(一)倫理的佛教、(二)哲學的佛教、(三)宗教的佛教の三類型である。又、この三類型は佛道修行の實踐道としての戒、定、慧の三學を中心として考へるならば、戒律佛教、禪定佛教、と智慧佛教の三類型と考へてもよからう。

佛教は印度に發生したが、釋尊在世中の印度の佛教は、即ち、原始根本佛教は極めて實踐的、戒律中心のであり、第一類型としての「倫理的佛教」を代表するものと云へよう。原始根本佛教は四諦八聖道、十二因縁、三法印を中心とするものであるが、その何れにあつても、修道工夫、實踐、戒律の實踐がその中樞をなすものであらう。「自燈明」「法燈明」

による自律性、主體性の倫理的實踐こそは根本佛教の生命であらう。一にも修行、二にも修行であつて、哲學的、理性的思想體系もそれは全く修行の最高目標である、解脱涅槃への補助道でしかあり得ない。修道、實踐の倫理生活こそ佛道修行者にとつて凡てであつた、と云つても過言ではあるまい。かくて佛教は本來的には極めて倫理的なものであり、倫理的佛教こそは原始根本佛教にとつては本質的性格であつたと云へよう。

釋尊滅後次第に發達し、龍樹や世親等の世に出た初期大乘から、中國に發達した天台、華嚴や眞言の如き大乘佛教にあつては、佛教は第二の類型としての哲學的佛教としての性格を顯著にしてきたようである。日本に於て集大成されたと考へられる鎌倉期の禪、日蓮、淨土の諸門としての大乗佛教は第三の類型としての宗教的佛教の特性を持つものと云へるであらう。このような三類型を作り上げた要因は根源的には佛教は生きものであり、死物ではないと云ふことであらう。生きたもの、生命あるものであれば、發達し、變化することは當然であらう。人間を初めとし動物、植物も生命あり、生きものとして存在する以上は必ず變化し發達するは當然であらう。併しこの生命あり、生きものとしての佛教を變化させ、發達させた大きな側面の力となつたものは(一)風土性、(二)民族性、(三)時代性の三つではなからうか。この三つが生きた佛教

を刺戟して大乘發達佛敎として變化させたものであらう。

次に、これら三類型に屬する三つの佛敎の特色について略述しておきたい。第一類型としての原始根本佛敎を代表する倫理的佛敎の特色は、主體的自己、強固な意思を中心として漸時に生死流轉、煩惱無明を滅盡して行く自力的努力、戒律嚴守の生活である。そこでは、あくまで現實と理想を分別し、煩惱を滅して菩提を求め、生死を滅して涅槃を求め、娑婆を捨て、寂光土を願ふ二元對立の上に立つて、現實より理想に向つて修道工夫し、ついに理想の涅槃に到達することを特色とするものである。現實の人間が修道工夫して一步一步と理想の涅槃、佛の世界に向つて漸進するのである。そこでは理想に反する現實、理想と對立する現實と云ふものが分別され、嚴存するのである。現實を「滅し」「捨てる」ところに理想が、涅槃が實現するとされている。倫理的な努力、修道、實踐こそ倫理的佛敎の生命であらう。意思中心、自力中心、戒中心、實踐中心の修道工夫こそは倫理的佛敎を支へる基柢となつてゐる。第二類型としての大乗發達佛敎を代表とする哲學的佛敎の特色は、知性中心、慧中心、自力的努力によつて、現實と理想を分別せず、煩惱や無明を斷滅しないで、生死や娑婆を捨離しないで、二元の對立が即の論理で聖化されるところに涅槃、菩提、寂光土を體驗しようとするところである。人間が佛の世界に到ると云ふことは、現實を離れて理想を體驗する

ことではなく、あくまでも現實を離れないで、現實に即して理想を體驗することが哲學的佛敎の生命であり、特色であらう。無分別智によつて、煩惱即菩提、生死即涅槃、娑婆即寂光土、是身是佛を體驗することこそ哲學的佛敎としての天台、華嚴、眞言佛敎の特色と云へよう。あくまでも現實に即して、現實をはなれないで、現實を理想とするすぐれた無分別智こそさとりへの道と考へられている。一如、不二、平等と云ふ體驗も亦無分別智による即の論理の具現に外ならない。

第三類型としての日本鎌倉期に興隆して現代に於ける日本佛敎界の代表的勢力である、宗教的佛敎としての禪、日蓮、淨土の特色は、三昧中心、定中心、自己沈潜的であり、否定即肯定的であり、人間から佛への道ではなくて、むしろ佛から人間への働きかけが中心となつてゐる。この宗教的佛敎は又同時に、南無佛敎、歸依佛敎であり、他力佛敎、信仰佛敎であり、受身佛敎でもある。人間は佛に深く歸依し、佛の世界は人間に強く働きかけ、その影響力によつて人間の心身が根本的に改造され、佛と人間とは常に交互媒介的に、逆對應的に作用し合つて、ついに人間性と佛性とが聖化し調和し、一元化するが如き佛敎がこの宗教的佛敎の特色であらう。萬法に證せられる禪の極地、唱題目、稱名念佛の日蓮や淨土の敎へにも、其の背後なり根底には大乘佛敎としての「無分別智」と「即」の論理が嚴存していることを忘れてはならぬ。